
王の酒と自転車 2 号

みゆう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王の酒と自転車2号

【Nコード】

N4739Z

【作者名】

みゆう

【あらすじ】

これは噛みあわない歯車に抗い、それぞれの幸せを目指す物語。遠坂凜は万を期して英雄王の召喚に臨むが致命的なうっかりを連発してしまう。全ての財宝を失うという重いハンデを持ったアーチャー陣営は酒と拳で勝利を目指す。一方、桜の遺言を受け取ったライダーは並行世界の衛宮士郎に喚び出された。彼女は桜を救うため、正義の味方とともに戦場を自転車で駆け抜ける。この作品はAradiaでも連載しています。

第1話 お酒だけですって!!?(前書き)

本篇再構成もの。英霊入れ替わりなどの状況改変です。

第1話 お酒だけですって!!?

とある屋敷の地下室にて、1人の少女は真夜中に動き出す。

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。祖には我が大師シュバイ
ンオーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出
で、王国に至る三叉路は循環せよ」

体を、心を齒車に変えて、一つの神秘を成すパーツへと変質させる。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。
ただ、満たされる刻を破却する」

魔法陣に用いた宝石の質は最高ランクのものを惜しむことなくつぎ
込んだ。じきに午前二時、魔力のピークも今で間違いない。触媒に
は、かの英雄王に縁のあると伝えられている“この世で最初に脱皮
した蛇の抜け殻の化石”を用いた。父が前回の聖杯戦争で用いるは
ずだった聖遺物。

ここまでやって失敗するわけにはいかないわ。

「
Anfang」
セリフ

魔力回路に魔力が走り、地下室には魔法陣を中心として濃密なエー

テルが渦巻いていく。

腕が 体中が、熱い。

「 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。
聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

さあ来なさい。最強のサーヴァント。私に勝利をもたらす者よ。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を
敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守
り手よ ！」

エーテルと紅い光の奔流が、地下室を弾き飛ばすかの如く吹き荒れ
る。あまりの眩しさに瞳を閉じた。そして期待して彼の訪れを待つ。

確信した。上手く行った。完璧だわ。

場の魔力が収まるのを感じとり、瞳を開く。しかし目の前には肝心
のサーヴァントはおらず、目の前には先ほどの魔力嵐で少し散らか
った地下室だけ。

どういうことよ。失敗したの？

すると、上の方から何か音がした。具体的に想像するならば、何か
が屋根に落ちて来て貫いたような、本当なら考えたくもないような
音が地下室からでも確かに聞こえた。

もしかして、またやつちゃった？

嫌な予感がして上の階、居間に上がる。何故か鬱陶しいことに、扉が壊れて開かなかったのでヤケクソ気味に蹴り飛ばした。

「ドア壊れてる！？ ああもう、邪魔だこのお！！」

すると目の前に広がるの凄惨たる光景。間違いなく屋根から何かが落ちて来て居間を滅茶苦茶にしている。そしてその原因であろう金髪の少年が紅いソファに腰掛けている。

どうしてこんなことになったのか、そう考え込むまでもなく柱時計の針を見ると理解した。この時計の針は一時間早い。つまり、魔力のピークに達していなかったためにこんなことになっているのだ。

しかし、この居間には屋根から降って来たと思われる少年がいる。召喚自体は失敗ではないはずだ。声を掛けようとすると、先に少年の方が話しかけて来た。

「あの、すみませんが。お姉さんが、マスターであってますでしょうか？」

自分より年下の小中学生にしか見えない金髪少年は、腰低い態度で少女に訪ねてきた。

「そうよ。私があなたのマスターの遠坂凜よ」

彼の姿を観察する。小柄な少年は一見只の外人の子供に見える。しかしあり得ない紅色の瞳に、人のみではありえないほどの魔力量。これが英霊でなくて何だというのか。

「そうですか。いきなり上空に召喚された上にマスターらしき人の

姿が見当たらなかったもので、しばし呆然としていましたが。お姉さんがマスターでしたか。よかった」

少年は笑顔を向ける。

やばい。この子凄く可愛い。そっちの気があつたら一瞬で落ちてしまいそう。カリスマ持ちねこの子。

「それじゃ、色々あつたけど気を取り直してさっさと契約しちゃいましょ」

「ええ。それがいいですね。まだ完全にパスが通りきっていないようですので」

「サーヴァント、アーチャ の名に懸け誓いを受けます。遠坂凜、この聖杯戦争において貴方を我が主として認めましょう」

拳の令呪が熱くなる。確かにここに契約が交わされたのだ。

ふ〜んアーチャーか。セイバーじゃなくて残念。でもこの子ってセイバーって雰囲気じゃないわよね。あつ。

クラス名は先ほどの誓いで少年の方から名乗って来た。しかし、まだ肝心なことを聞いていないことに気づく。

「あつ、忘れてた。それで一つ訊ねるけど、あなた本当にあのギルガメッシュで間違いないわね？」

「ええ、間違いなく僕がギルガメッシュ本人です。お姉さん、こんな姿では信じられないかもしれません」

「あの英雄王がこんな子供だったとはね。まあいいわ。ところで、パスはきちんと繋がっているみたいだけど、貴方の現在の調子を教えてもらえるかしら？」

「ええ、お姉さん。魔力は充分過ぎるほど供給されています。そのおかげか敏捷値と魔力値が上昇してます。他のステータスはあまり変わりません。ただ幸運値が大幅に低下しているのが気になりますね」

「うわあ。私も今確認しているところだけど、あなたかなり凄いいじやない。筋力B、魔力A+、耐久B、敏捷A、宝具A++ですって！？ 幸運値がEつてのを除けば、アーチャーとしては破格よ。ひよっとしたらセイバー以上かもしれないわ。本当あなたを召喚して良かった」

見た目が子供のため、能力が低いのではないかと懸念していたがそんなことはない。予想以上の現状に思わず笑みが零れてしまう。アーチャーも顔を若干赤くしながら笑みを返してきた。

「ありがとうございます。そう褒めてもらえるのはうれしんですけど、実はこの姿って最盛期のすがたじゃないんですよね。実際の戦いになったらリーチの問題が出て来ると思います」

「何でリーチが関係するの？ あなたアーチャーでしょ。遠くから狙撃すれば問題ないじゃない。もしかして弓を引くのに背が足りないなんて言わないでよね」

「そこなんですが、さっきの召喚のせいなのか、宝具は2つの内の1つがなくなっていて……」

「えっ？」

一瞬、頭の中が真っ白になった。何かが崩れ落ちるような音、仏壇で鳴らす“あの音”の幻聴が聞こえた気がする。

「もう一度言って頂戴。アーチャー？」

「お姉さん、いえ、マスター。報告すると僕が所有しているはずの宝具が一つ足りません」

場の空気が凍りついた。これは“うつかり”では済ませられない事態かもしれない。アーチャーも年相応の子供のような、すぎる瞳を向けて来る。

「原因はさておき、それって拙いわね。ちなみにどういうものだったの？」

「ラ、ランクEXの剣です」

「な、EX！？」

「はい、お姉さんの魔力なら存分に扱えるはずだったんですけどないものは仕方ありません。もう一つの宝具でなんとかするしかないんですけど、けど……」

「けど？ そっち宝具はどんなもののなの？」

ゲート・オブ・バビロン

「ランクはE A++の王の財宝というものなんですけど、これは本来別空間にいろんなものを入れておいて自由に出し入れができるというもので、そのなかには僕が生前集めていた宝具の原点となる武器や世界中の財宝なんかが入っています」

「世界中の財宝！？ もしかして宝石もいっぱい入ってるの？」

「ええ。いっぱい入っていました」

「いました？」

「中身が、中身が何故か“ない”んですよ」

「なんですって？ もう一回言って頂戴アーチャ。ああ、もう。この言葉二度目ね」

先ほどの言葉が聞き間違いでなければとんでもない事態だ。きっと自分は今、死人のように蒼白な顔をしていることだろう。そして目の前のアーチャーも生気が表情に宿っていなかった。

「武器も財宝も全く手元に“ない”んです。さっき空から落ちてきたとき、飛べるものを用意しようと思ったたら何もなくて。何故か“

「お酒だけ」はあるんですけどね」
「酒、お酒だけですって！！？」

あまりの衝撃に膝から崩れおちた。涙すら出て来ない。むしろ笑いたいほどの衝動が腹の底から湧き起こって来る。

もうダメだ。勝てる気がしない。

ごめんなさい。天国のお父様。そしてどうして遠坂家の呪いを解いてくれなかったのですか。

「僕の手元には肝心の武器がない。これは非常に拙い状態です。お姉さん、これから僕たちはどうしたらいいでしょうか……」

「な、なんで、こうなるのよ！」

両手を床について嘆く。あまりにもみっともない姿だが、己の迂闊さに心から嫌気がさすのだ。

「僕に言わないで下さいよ。途方に暮れているのは僕も一緒なんですから。もう少しこれからの前向きな対処方を考えましょう。まだ全てのサーヴァントは召喚されていないのでしょうか？」

「ええ。まだセイバーとライダー、アサシンは召喚されていないらしいわ」

「でしたらそれまでの準備期間に宝具に匹敵する武器を世界中から集めましょう。僕の攻撃は主に剣の射出ですから。とにかくたくさん必要です。ステータスは他に劣らない自信がありますし、剣も問題なく扱えますが、こちらと違って敵は宝具を使えます。宝具でなくともいいのでそれに劣らないぐらいの武器を確保できないでしょうか？」

「冗談言わないでよ！　ただでさえ家の魔術はお金がかかっている

の！ あなたを呼び出すための魔法陣に使った宝石だってかなり痛い出費だったのよ！ それでこの現代に宝具に匹敵する武器を調達するですって！？ 冗談じゃないわ。もう今夜はヤケよ！ その酒つてのを寄こしなさい。今日は呑むわよアーチャー！」

「お姉さんって、未成年じゃ？ 日本って20歳未満はお酒はダメなんですよ」

「グダグダ言わない。さっさと出しなさい。世界の財宝を集めつくれたアンタがもってるからにはよっぽど良いお酒なんですよ。出しなさい。そして酌しなさい。これはマスター命令よー！！」

「……はい」

酒がないとやってられないわ。今日の出来事なんか忘れてやるんだから。

やれやれといった様子でアーチャーは背後に現れた空間の割れ目からその酒を取り出した。そして注がれた酒を一気に飲み干す。

「あら。これすごい美味しいじゃない。こんなの一度飲んだら他のお酒なんて飲めないわね」

「気に行って頂けて何よりです」

「本当においしいわ」

本当に言葉で表せないくらいにおいしい。これのためなら宝石の1個や2個惜しくないわね。ん、アレ？ アーチャーのものは私のもの、私のものは私のもの。うん。間違ってたない。なら、これはもしかしたらイケるかもしれない。

「なんだか凄く嬉しそうですね。元気になってくれて良かったです」

無邪気で、そして不幸なアーチャーはあかいあくまの企みを何も知らない。

第1話 お酒だけですって!!?(後書き)

他にメインの作品があるため、正直不定期更新だと思っています。が、アイディアは大体出来上がっています。感想など頂けると幸いです。次回はシロウの物語です。

第0話 それではお使いに行ってきます（前書き）

本当は士郎サイドの話の予定でしたが、今回はプロローグ的なものになります。かなり短いです。HFのTrueエンドに近い形の未来での話。

第0話 それではお使いに行ってきます

「ライダー、もし“先輩”と、この先出会うことがあるのなら
どうか“先輩”の力になって下さい」

そう最期に言い残して、彼女は去っていった。何の未練もない、
安らかな笑みだった。それを見てつられたのか、この世界で最も愛
する人を失ったのにも関わらず、自然と自分も笑っていた。そして
何故だか涙は流れなかった。

柔らかな風が吹き、庭先の桜の花びらが舞う。まるで空からの祝
福のように。きっと彼が迎えに来てくれたのだろう。これからの桜
は自分の代わりに彼がいるから大丈夫だ。

「桜をよろしくお願いします。士郎」

そしてもう一度、彼女の最期の言葉を心の中で反芻した。

『“先輩”と、この先出会うことがあるのなら どうか“先
輩”の力になって下さい』

“士郎さん”ではなく、“先輩”。それはかつての日々の呼び方。
その言葉が意味するところは誰よりも自分がよくわかっている。

遺言は確かに受け取りましたよ。

少しずつ薄れていく手を握り締め、空に行った彼女に誓った。

「いい笑顔してるじゃない。桜はきっとアイツのところに行けたのね」

唐突に現れたのは、愛する主の姉である人物。彼女の頭をひと撫でして、取り出したハンカチーフを顔に掛ける。

「今まであの子こと、ありがとうねライダー」

少しだけ目頭に涙を浮かべながら、感謝の言葉を口にする彼女。

「私は桜の“使い魔”であり、家族ですから当然のことです」

第二魔法の後継者として大成した彼女は最盛期の容姿のまま。そして当然、人ではない自分の姿も変わらない。土蔵も、屋敷も「あ

の頃と変わらないように」と、彼女が、彼女の教え子たちが管理し続けた。ただ、目の前にソメイヨシノが咲き誇っている姿だけが月日の流れを感じさせる。

彼女と出会ってからの日々が走馬灯のように駆け巡る。

結婚の記念にと、彼がこの木を植えてから確か60と8年だったでしょうか。そんなに経ってしまったんですね。早いものです。

「それでライダー、あとどれくらい残されているの？」

「あと10分といったところでしょか」

「そう。もう一度確認するけど、私と『使い魔』の契約を結ぶつもりはないのね？」

「この屋敷を任せる者はいますし、桜の教え子たちも立派に育ってくれました。もうこの世界に思い残すことはありません」

「貴女は還るつもりなの？」

「ええ。違う世界の桜と土郎のところへ」

その言葉に凜は顔をしかめた。それは無理だとも言つのだろう。

そんなことわかっていますよ。それでも、それでももう一度、いえ何度でも奇跡に掛けたいのです。かつての私たちがそれに掛けて、この手に掴んでみせたように。

「ライダー、座に戻れされた貴女は記憶もなくして只のメデューサになるの。そして並行世界で桜が必ず貴女を呼び出すとは限らないわ。だから提案があるの。私が貴女を」

「並行世界に飛ばす、ですか？ それではダメです」

「どうしてよ！？ 今の記憶を失くしたら……」

「そもそも現界するための魔力が足りません。魂喰いをするなら別

ですが、それを2人は望まない」

「あつ、そうだった」

この歳になつても“うつかり”なんて、大丈夫でしょうか。なんだか心配です。

「それに何より、それでは一つの世界の桜と士郎しか救えないではありませんか。出会えるだけの2人の力になりたいのです」

「そう」

「もし別の世界で貴女と会うことがあつたらそのときはよろしくお願いします」

「私と貴女の仲じゃない。当然よ」

「そろそろ時間のようです。桜に頼まれたお使いに行かないとですね」

腰掛けていた縁側から立ち上がって土蔵に向かう。そして彼が2号と呼んでいた自転車のハンドルに手を掛ける。彼から正式に譲り受け、彼女が変わらぬように魔術で保ち続けてくれた自転車。俗にママチャリと呼ばれるタイプのものだ。自転車としての機能に不満は多々あるが、これなしで生活はできないほど体に馴染んだ相棒である。

自転車を押して門のところへ向かうと、凜が見送りに来ていた。

「気をつけて行ってらっしゃい、ライダー」

「はい。それではお使いに行ってきます。凜、桜、士郎」

どれだけ漕ごうとも僅かにしか進まない相棒に跨り、門に背を向ける。

いつものように「行ってきます」と、今は亡き愛しき人たちの中で告げ、ペダルを力強く踏みしめた。

「ライダーのバカ。本当にお使いに行くみたいに……」

薄れゆく意識の中、そんな声が聞こえた気がした。

第0話 それではお使いに行ってきます（後書き）

次こそ召喚。

第2話 俺に力を貸してくれ（前書き）

いよいよ召喚。あるメインキャラの設定がとんでもないことになっています。そしてその影響で士郎も今までのどのルートの士郎とも別人になっています。その点をご了承ください。

第2話 俺に力を貸してくれ

赤い槍を持った長身の騎士と、黄金の鎧を纏った小柄な少年が夜の学園のグラウンドにて死闘を繰り広げていた。

「最初に釣れたのがこんな小僧だとは思わなかったが、中々やるじやねえか。待った甲斐があつたつてもんだぜ。もつと死合おうぜ」
「できれば僕はさつさと終わらせたいんですけどね。最近、仕事が溜まつてるんですよ」

興奮した口調で頭部目掛けて鋭い突きを放つ蒼の槍兵に対し、黄金の少年はため息交じりに両刃の片手剣で槍の矛先を弾く。

そこからは目にも止まらぬほどの突きが、少年の喉を、眼を、四肢を、内臓を目掛けて襲いかかる。防戦一方のように見える少年。しかしながら積極的な攻撃こそできていないものの、押されているのは槍兵の方だ。動き自体は僅かに蒼い槍兵のほうが早い。だが少年は力押しで槍を弾きながら前に踏み出し、間合いを取らせないようにする。そのためどうしても槍兵は間合いを保つために後退しながらの戦いになる。

「にしても、その剣の扱いを見てると雑だな、お前。何と言つか雑だ。サーヴァントってのは本来最盛期の姿で現れるつてもんだろ？」

セイバー、実はお前、本気を出せないんじゃないのか？」

「そう言いながら、僕に力負けしてるじゃないですか。そんなんですから、今はまだ、本気になるまでもありません。そういうことだと思って下さい。僕のマスターはケチなんですよ」

自信を安く見られたことに憤慨し吠える騎士。

「舐めやがってセイバー！ 本気を出さなかったことを後悔させてやる！」

より多くのフェイントを混ぜながらも、より鋭く急所を狙った突きが少年に襲いかかる。楽しむための戦いが、敵を仕留めるためだけの戦いに切り替わった。

予想以上にイケてるじゃないアーチャー。

無銘の片手剣で戦うと言いだしたときは正気かと疑いたかったが、確かにあれだけのステータスがあればランサーにも十分対抗できている。おそらくアチラは手出ししなくても大丈夫だろう。なんとつてアイツには切り札がある。しかも都合のいいことに相手はセイバーだと勘違いしたまま。格好の的になると良いわ。

掴み掛けている初勝利の前に思わず笑みが零れそうになるが、問題は私の方だった。

アーチャーとランサーが戦っている傍らでマスター同士も戦っていた。相手は男物のスーツを纏った男装の麗人。名はバゼット・フラガ・マクレミッツ。封印指定の執行者。間に合わせの剣でも何とか抑えられているランサーよりも、彼女の方がはるかに厄介な相手だった。おそらく全マスター中、戦闘力だけで言えば最強だろう。

しかも彼女は手にナックルを嵌めて、ボクシングよろしくパンチの応酬を繰り返してくるのだ。人間凶器といっても過言ではない。

ランサーのマスターが接近戦を仕掛けて来るのに対し、こちらはガンドで牽制しながら距離を取り、適宜宝石魔術を打ち込む。隣の戦闘とは逆の状況だ。

強化の魔術を込めた宝石を使用しているが、それに対峙するのがやっとというのが現状。

「まさか執行者のマスターがいるなんてね。しかもボクシング？一発が重過ぎんのよ」

「セイバーのマスター。その歳で私の動きについて来れるとは貴女も中々やりますね」

私に体術の心得がなければ瞬殺されていただろう。必死でガードするが、その度に腕にしびれが走る。

正直このままでは厳しい。相手の体術がボクシングだけかと油断していた矢先、鋭い膝蹴りが鳩尾に刺さる。

口から血が出た。とにかく重い一撃。追い打ちの回し蹴りを横に転がるようにして回避する。

「貴女、本当に人間？ どうかの兵器の間違いじゃないの？」

「どちらでも構いません。今の私は貴女を葬るただけに存在するのですから。……そろそろ終わりにしましょう。セイバーのマスター」

5 mほど先で膝をついている私を見下すように、ナックルを弄り

ながら彼女は最終通告を告げる。

宝石を湯水のように使えば勝機はあったが、私たちはまだ残り6機のサーヴァントとそのマスターを倒さなければいけないのだ。戦争の序盤からそんな勿体ないことはするわけにはいかない。せいぜい今は私に勝ったつもりでいればいい。

相対するマスターを睨みつける。その奥に撃ち合っているランサーと、アーチャーの姿が見えた。よし、ベストポジションだ。アーチャーの射線上にランサーだけでなく、マスターも並んでいる。加えてランサーとは適当な距離も取れており、少なくともマスターの方は“殺れる”絶好のチャンスだ。

そう判断した私はレイラインを通じてアーチャーの戒めを解く。

マスターごと打ち抜きなさい、アーチャー　！！！！

確かにそう命じた。だが、アーチャーは宝具を使わなかった。それどころか動きを止めている。

どういうことよ？　アンタは私の下僕サーヴァントでしょう。さっさと“殺りなさい”――！！

もう一度命じるが、アーチャーは動かない。そしてそれはランサーも敵マスターも同じだった。彼らも一歩も動かない。どこか違うところに対して3人は視線を向けていた。そう、私の背後に。

異なる気配に気付いた私は振り返るとようやく状況を理解した。校舎の中へ逃げ込む影。人払いはすっかりしてあったはずなのにも関わらず、まだ学園に人が残っていたのだ。また“うっかり”をやらかしたらしい。アーチャーを呼び出してからこれで通算何度目の“呪い”やらと、強い自己嫌悪が襲う。これが私のせいならば、私が尻拭いをしなければならない。

だがそれより早く、敵の主従が影を追い始めた。口封じに向かったのだろ。サーヴァントと封印指定の執行者が追っているのだ。間違いなく彼は生きては帰れまい。そして不幸な運命に導かれようとしている彼の姿に私は見覚えがあった。

「何でよりによって、“アイツ”がここに居るのよ！」

何でここに居るのだと、自分のことを棚にあげて“アイツ”に恨み事を言いながら、敵の跡を追う。だが、“ソレ”を見たときには、自分の中の都合のよい感情は全て否定された。

“アイツ”のせいでもない。私の“うっかり”のせいでもない。

“私”のせいで、彼は死んだ。全て“私”のせいだ。

その責から逃げるためではない。そう言い聞かせながら、私は一つの選択をする。これは私の気まぐれ、心の贅肉のせいだと誤魔化して、私は一番大切な紅いペンダントを使うことを決めた。

それなのに、それなのに

私は彼に裏切られた。

深夜、コンビニに買い物に行こうとしたら教室に財布を忘れていることに気づき、仕方なくいつもの裏ワザでこっそりと取りに帰った。ただそれだけのことだったのに。どうしてこういうことになったのだらう。

グランドで繰り広げられている二組の死闘を目にしまった。

一組は自分が一生かかってもできそうにないほどの高度な魔術を惜しみなく放つツインテールの少女と、それに対して拳で立ち向かう男装の女性。何故魔術師が戦っているのか疑問であったが、もう一組の戦いの方に興味が向いてしまった。

黄金の剣閃と紅い槍の軌跡。とても人間業とは思えないものだった。しかも自分より幼い少年が若干押しているように見える。自分には辿りつけない領域にしばし言葉を失っていた。そして自らの理想である姉の姿と比較する。高度な技術を力技で叩き伏せるその少年の姿。姉もどちらかと言えば腕力で物を言わせるタイプだが、それとは違う。姉の技の方が好みであったが、何故か少年の剣には惹かれるものがあつた。そして悔しかった。

何故、彼には才能があるのにそれを極めようとしなのだろう。才能がないからこそ極めるしかない自分と比較して怒りの感情、殺気さえ覚えてしまった。それがいけなかった。

目線が合ってしまった。

自分の存在が彼らにバレた。おそらく自分は魔術師として認知されていない。このままだと神秘の秘匿のために殺される。だが、先ほどの光景は魔術師であっても見てはいけないものの類だと言うことは直感で分かった。

だから逃げた。みつともなかったが逃げた。

絶対に敵わない存在と言うものを、この身はよく知っている。“アレラ”は義姉と同じ“使い魔”だ。人間には絶対に勝てない。

だから逃げた。でも槍兵に追いつかれてしまった。

必死の抵抗を試みたものの廊下で心臓を一突きにされ、自分は確実に死んだはずだった。

死んだはずだった。

しかし、再び目が覚めてしまった。死んだはずの廊下、体には傷一つない状態。しかし、服は傷つき血まみれの状態。傍には魔力が残った赤い宝石のペンダント。思い浮かぶのは、追って来なかった方の少女。彼女の気まぐれなのか、どうやら自分は助けられたらしいことは理解できた。だが、周りに彼女たちの気配はない。救われた命に感謝しつつ、一刻も早く家に帰ろうと決意する。

「大丈夫ですか！ シロウ！！」
「うん、アル姉。何でもか生きてる」

そして当然のように家路の途中で姉に出会った。先ほどの魔力が気になったのか、帰って来ないのが気になったのか、多分両方だろう。眼を腫らして泣きそうな顔で見つめている。本当に心配させてしまったのだろう。彼女を泣かせることがなかったことに心から安堵する。

良かった。生きていて良かった。

月の輝く夜。月光に照らされる義姉のブロンドの髪と白い肌。今日ほど彼女が美しいと思った日はなかった。

「これだけの血、またシロウは無茶をしたのですか！」

血だらけの胸元に手を当てて、彼女は怒りを表しながら言う。

「無茶をした覚えはないんだけど、学校でアル姉と同じような感じの“使い魔”たちが戦ってるのを見た」

「やはりそうでしたか。私が傍に居れば……それでその後どうなったのですか？」

「うん。口封じのために殺されかけたけれど、他の魔術師に助けてもらえたみたい。何か裏がありそうだけど、とりあえず俺が生きてるってのだけは間違いない。だから早いとこ家に帰ろう」

そして家に向かって歩き出す。家に帰れば平穏が待っているはずだった。

着替えを終えて、これから縁側で話し合いをしようとしていた矢先だった。結界の警報が鳴り、家に突然の襲撃者の訪れを伝えた。先ほどの槍兵と、男装の麗人。彼らと庭先にて対峙する。

「確かに心臓を貫いたはずなのに生きているとはな。一体どういうタネを使っただんだお前？」

「只の一般人だと思ったのですが、高度な治療魔術の使い手にして、しかもマスターでしたか。迂闊でした。しかし今度こそ確実に息の根を止めて見せます」

肩に担いでいた紅い槍をクルクルと回した後、矛先をこちらに向ける槍兵。傍らで魔術師もファイティングポーズをとる。

「シロウは下がってジツとしていてください。私が相手をします」

自分を護るようにアル姉は前に出る。そして本気の時の服、蒼いドレスの上から白銀の甲冑を纏っていた。そして手には“何か”を握っている。

「ほう。私達2人相手を同時に相手取るつもりですか」

「それくらい出来なくて何が“使い魔”か。問題ない」

「いいぜ、お前クラスは何だ？ セイバーとはさっき殺りあつたし、アサシンのような後ろめたい存在ではなさそうだ。ライダーかアーチャ ってどこか？」

「貴様にそれに応える必要はない」

そう言つてアル姉は“見えない何か”、おそらく剣を槍兵に向かって真上から叩きつける。

あんなに怒っているアル姉は初めて見た。

今までに見たことのないほどの圧倒的な技の嵐を槍兵に向ける。対する槍兵も神速の突きによる弾幕を繰り出す。

再び人を超えた身の戦いが衛宮庭で繰り広げられた。

一旦距離を取った2人が剣戟と突きの代わりに言葉を交わす。

「どうしたランサー。止まっていたのは槍兵の名が泣こう。そちらが来ないなら、私が行くが」

「は、わざわざ死に来るか。それは構わんが、その前に一つ訊かせろ。貴様の宝具、それは剣か？」

「さあどうかな。戦斧かも知れぬし、槍剣かも知れぬ。いや、もしや弓という事もあるかも知れんぞ、ランサー？」

「はっ、ぬかせ嬢ちゃん。強がりには大概にしな。確かに見えない得物つてのは戦いにくいが、さっきのセイバーの方が一撃、一撃は重かったぜ」

「何をぬかす貴様、我が宝具を受けてみるか!？」

「ああ。こちらこそ我が槍の威力、見せつけてやろう
　　と思
　　つたが、その必要はないらしい」

大きく一步後ろに跳躍した槍兵は告げる。

「お前さん、2人を引き受けた割にはマスターの警護がお留守じゃねえか。悪いがウチのマスターの勝ちだ」

少女の顔が蒼白になり、ランサーの背後に位置する土蔵を見る。木刀を振るいつつも、門のところに追い詰められていた彼は、胸元を殴り飛ばされ土蔵の門ごと中に突き飛ばされていた。向かおうとする彼女の前に、無慈悲にも男が立ち塞がる。

「シロウ逃げて!!!」

どうやらアバラを2、3本持つて行かれたらしい。土蔵の中に突き飛ばされ、背中を自転車にぶつけた。そのせいで左足首さえ挫いたらしい。最悪だ。門のところに魔術師が立ち塞がる。もう退路はない。かと言って、先ほどの木刀は彼女の背後。いくら日ごろ剣術を鍛えていたところで肝心の武器は手元がない。

完全に詰んだ。死という言葉が頭によぎる。

いやだ。まだ死にたくない。

俺は絶対に生きなくちゃいけないのに。

10年前の地獄の光景が脳裏に蘇る。

黒い太陽、燃え盛る焰、誰かの亡骸、最期の嘆き、そして

俺を助けてくれた2人の笑顔。

絶対俺は生き延びなくちゃいけないのに。なのに、俺は無力だ。

外でアル姉が呼ぶ声がした。こうやって俺は護られるばかりのま
ま終わってしまうのか？

2人みたいになれず、俺は誰も救うことができないまま終わって
しまうのか？

そんなのは絶対に嫌だ。せめてアル姉は俺の手で護りたい。

でも俺には力がない。俺に力があれば、みんなを救ってやれるの
に。

しかし無慈悲にも魔術師は止めを刺すべく、近づいてくる。

「もういいでしょう。せめて最期は苦しめよう、ひと思いに殺し

てあげます」

目の前の魔術師が渾身の魔力を込めて拳を振り被った。最期の瞬間に、普段全く信じてもない神へと祈る。

俺に力があれば！！！！

最期にそう願った。

その瞬間、土蔵を中心にして光の奔流が走る。新しく生まれ出ようとする存在の圧倒的な威圧感に、魔術師は後方に大きく飛び退き、場にエーテルの嵐が吹き荒れた。

光が収束して、光と呼べるものは月の光だけになった。そして月光に照らされて立っていたのは、1人の美女。腰まで届くほど長く伸ばした藤色の髪に、眼帯で両目を隠した長身の女性。だがその存在は明らかに人のものではなく、庭で戦っている2人と同質のものと感じ取れた。

彼女は口を開く。

「　　問いましょう。貴方が、私のマスターで間違いありませんね？」

マスターという言葉は敵の魔術師も使っていたが、おそらく使い魔の主という意味だろう。すると、左手の甲に焰で焼かれたような鋭い痛みが走った。もしかしてこれが契約の証なのだろうか。

「マスター？　お前も“使い魔”なのか？」

「ええ。サーヴァント・ライダー、召喚に従い参上しました。マスター、ご指示を」

「ライダー、そう呼べばいいのか？」

「はい。私は騎兵の粹を与えられたサーヴァント。ライダーとお呼び下さい、マスター」

サーヴァントという意味も、騎兵の意味も理解できなかったが、彼女が自分の使い魔になったことだけは理解できた。上半身を起こして、右手を差し出す。

「ライダー。俺に力を貸してくれ！　俺には、助きたい人がいる」

彼女は跪いて差し出された手を取り、誓いを口にした。

「了解しました　これより我が魂は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にあります。　ここに、契約は完了しました」

第2話 俺に力を貸してくれ（後書き）

士郎はライダー です。そしてこの士郎は切継だけでなくアルトリアにも影響を受けています。なぜアルトリアがいるのかはおいおい書きます。オルタじゃなくてご存知ハラペコ王の方です。

バゼットさんはじめ、マスターやサーヴァントの組み合わせが変わっています。良かったら感想頂けると嬉しいです。

第3話 この真名にかけて

私は座に戻った。

そして、“彼女”に召喚されるのを待つだけだった。どれくらい待ったのかはわからない。なぜなら時間という概念はこの場には存在しないから。

“メドゥーサ”という英霊に統合され、この記憶が無くなったとしても、その世界の“彼”と共に“彼女”を救ってみせる。この想いが“メドゥーサ”のどこかに残っていれば、私はそれを必ず成し遂げみせる。そう自分に誓って座に還った。

それからのことはよくわからない。おそらく“メドゥーサ”に統合され、本来なら“私”の意識など存在しないはずだった。

「俺に力があれば……！」

かつての戦友の声がした。それが“彼”の声だと認識することができた。メドゥーサとしてではない、ライダーとしての私がそれを認識することができた。

彼は力を求めている。

だから私は行かなければならない。“彼女”との誓いを果たすために。

そうして私は二度目の第5次聖杯戦争に、“ライダー”として召喚された。

「
問いましょう。貴方が、私のマスターで間違いありませんね？」

赤い短髪、小柄ながらも鍛えられた肉体、どこか呆けた表情。私を喚んだであろう少年は、遙か昔に肩を並べて戦った頃と同じ姿。間違いなく彼は衛宮士郎その人だった。

彼は胸部を左手で押さえながら、仰向け気味に座り込んでいた。その手に宿る3画の令呪が赤く光っているのを確認できた。よって彼がマスターなのはほぼ間違いないが、呆けた表情を見るに聖杯戦争のことを知らない状態なのだと推測する。

「マスター？ お前も“使い魔”なのか？」

“マスター”という言葉の意味がわかっていなかったようだ。やはり、今の彼はまだ聖杯戦争について知らない。しかし彼の返答は予想以上にしっかりしたものだった。「なんでさ？」と返されても仕方ないと考えていたため、目の前の彼の評価を改める。少なくとも自分を“使い魔”だと認識している。“使い魔”という認識があっても“サーヴァント”という言葉を知らない様子から、彼は聖杯戦争のことを知らない魔術師という立ち位置にいるのだろう。

「ええ。サーヴァント・ライダー、召喚に従い参上しました。マスター、ご指示を」

目の前の彼は胸部を抑え吐血していることから、間違いなく敵の襲撃に遭っている。今は懇切丁寧に聖杯戦争のシステムについて教えている場合ではなさそうだ。彼の僅かな勘違いを正すことなく、ごく普通のサーヴァントとして当然の態度をとった。わが身ながら白々しい。

「ライダー、そう呼べばいいのか？」

「はい。私は騎兵の枠を与えられたサーヴァント。ライダーとお呼び下さい、マスター」

マスターと呼んだことが効いたのか、彼は私を自らの“使い魔”

と認め右手を差し出した。

「ライダー。俺に力を貸してくれ！俺には、助けたい人がいる」

彼の言う“助けたい人”が桜なのかそれとも他の誰なのかはわからない。しかし私はその瞳に背中を預けていたころの輝きを見出した。彼女が最も苦しんでいたとき、たった2人で戦ったあのとときと同じ瞳の輝き。確かに頼りない彼の面影も垣間見える。しかしそれ以上に彼の瞳には信じてみたい何かがあった。

背後に気配が近づいてくる。これ以上時間がない。私は跪いて差し出された手を取り、誓いを口にした。

「了解しました　これより我が魂は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にあります。ここに、契約は完了しました」

スーツ姿の女性が背後に迫る。私と同じくらい背が高く、体格も良い。戦い慣れた者の臭いがする。初めて相対するが、おそらくは敵のマスター。彼女が士郎をこんな姿にしたのだろう。だが、私が召喚されたことに酷く驚いている声色だった。

「この場でライダーを召喚とはどういうことですか！？　貴方は先ほどまでマスターではなかったと？　ではランサーと戦っているサ―ヴァントは一体……」

ランサーと戦っているサーヴァント？

土蔵の外に感じる二つの魔力。野獣のように猛々しく、殺意と闘志に溢れた魔力は彼女の言うランサー、私の知っているあの槍兵と同じのものだろう。そしてもう一つ。凜々しく、誇り高い魔力の塊。これは間違いなく彼女のものだ。彼女が士郎のサーヴァントでないのならば、考えられるのは凜がマスターだろうか？ いや、思案する時間はない。士郎に確認するなど、もっての外だ。

瞬時に敵の方へ振り向いて短剣を投擲。

「なっ！」

心臓目掛けて放った短剣は地面に突き刺さる。敵は動揺しながらも鮮やかなサイドステップで右に避けた。そこに前傾姿勢で飛び込み一歩で間合いを詰める。

左ローキック　　当たった。だが、若干浅い。初撃が奇襲でなければどうだっただろうか。彼女、人間にしてはできる。

それでも足払いも兼ねたその一撃は敵の右足の支えを奪った。体を後ろに仰け反る形になる魔術師は苦悶の表情を浮かべる。

「痛っ」

そこに投擲した短剣を鎖で引き戻し、追撃を加えようと構えるが、敵は仰け反った姿勢からバック転の要領で後方へ跳躍。そのまま退却してくればいいが、その保証はない。

2回転目の着地に合わせるように、もう一度短剣を投擲した。

しかし短剣は今度も敵を捉えることなく、高い金属音と共に弾かれる。赤い槍を持った騎士、ランサーが彼女を庇う形で間に入っていた。

「バゼット、危なかったじゃねえか」

「ランサー、感謝します」

「そうも言ってられねえみたいだぜマスター」

敵の魔術師は安堵の声を発するが、槍を携えた騎士は目を鋭くさせたまま警戒の色を一層強める。その目線の先にはもう一人の騎士の姿があった。

ランサーと敵の魔術師の左方を取るようにして現れたのはセイバー。影に吞まれて闇に堕ち、かつて私たちと死闘を演じた彼女ではない。“彼”のサーヴァントとして光り輝いていた頃の彼女がいた。

好戦的なセイバーだ。少なくともランサーを仕留めようとするだろう。しかし“器を満たす”速度はできるだけ遅い方がいい。少なくとも、今はまだ。

「ランサーのマスターよ。観念するがいい。これで2体1だ！」

「セイバーとの戦いで消耗した後には2騎のサーヴァント、流石に分が悪いですか」

「ライダー、助太刀感謝する。まさか聖杯戦争が再び始まるとは。私はセイバーのサーヴァント。故あって貴公のマスターを護る者」

士郎を護っているという彼女の言を聞いて安心するが、彼女の言葉にはどこか引かかるものがあった。しかし、それ以上にランサーの主従は驚愕を隠せなかったようだ。

「セイバーが2騎だと!？」

「クラスの重複はありえない。ですが、それならば、まさか!？」

「気付きましたか? 魔術師^{メイガス}。ええ。一つの聖杯戦争に召喚されるサーヴァントのクラスが重複することは、まずありません。

私は10年前、この地に降り立ちました」

「おい、今なんて言いやがった？」

「シロウもマスターになったことですから隠し事は止めましょう」

後ろ髪を纏めていた青いリボンを彼女は左手で無造作に取り外すと、場における彼女の威圧感が急激に増大した。

「おいおい、その魔力。さっきまでと違いすぎるだろうが、そりゃあ!？」

ランサーは顔をしかめる。それはそうだろう。さっきまでとは2段階ほど違う。圧倒的だ。私にはわかる。あの“黒い騎士王”とまではいかなくとも、それに準じるほどの存在感。

見えない剣を地面に突き立て、勇ましく、そして高らかに彼女は宣言した。

「私は第4次聖杯戦争にてセイバーとして喚び出され、そして聖杯を手に入れた。ランサー、そしてそのマスターよ。この最強を恐れぬのなら、いざ、死力を尽くして来るがいい。この剣にかけて、貴様等の挑戦に応えよう!!!」

拙い。敵マスターが軽く負傷とはいえ、これで好戦的なランサーが退く理由が少なくなった。彼は戦いを求めて現界した身、最強を目の前にして立ち向かわないはずがない。

何をセイバーは考えているのだろうか。これでは敵が退くどころか逆効果ではないのか。そう思案しているとセイバーが口を開いた。

「ライダー。ここは私が。騎兵たる貴女にシロウを任せます」

そういうことが。きっとランサー相手では2対1でも退かない可能性もありうる。それならば、確実に足止めのできるセイバーが足止めをして、私に士郎を逃がさせる方がベター。そうセイバーも判断したのだらう。ならば、グズグズしているわけにはいかない。

しかし、きつと士郎は逃げることを良しとしない。だから、

「ライダー、アルねえの加勢をしてくれ。俺はこの戦いを止めたい！」

「すみません。マスターそれはできません」

「なっ……ライ、ダー。おま……」

近づいてきた士郎の首筋に手刀を入れて意識を奪う。左手で彼の体を担ぎ、使いなれた相棒を呼び出す。

彼を肩に担いだまま右手で自転車のハンドルを握り、一触即発のセイバーに声を掛けた。

「マスターのことは任せられました。セイバーご武運を。しかしできるなら、彼らはまだ倒さない方がいいとだけ忠告しておきます」

「そうか。戦略的のことを貴女が考えているのでしたら一考しておきます。それより早く」

「ええ、それでは」

ペダルを強く踏み出し、“ライダー”になってから扱えるようになった新たな宝具の真名を解放する。

「ライフ・サイクル
自転車2号」

桜色の閃光と共に、漕ぎだした相棒は一気に最高速に乗った。

そして、新都と深山町を結ぶ橋の下まで無事に辿りつく。途中、金色の何かを轢いた。気がするがそれは大したことではないだろう。セイバーは心配しなくても良いはず。あとは士郎の眼が覚めるのを待つだけだ。知っている第5次聖杯戦争との違いを整理する。そして今日も苦しんでいるであろう彼女に思いを馳せた。

「桜、必ず私たちが貴女を救ってます。英霊“ライダー”
この真名にかけて」

おまけ

「あれはライダー！？ アイツの姿が一瞬見えたけど、まさか彼がマスターだったなんて」

「僕を盾にするなんて酷いです」

「だってアンタ耐久Bじゃない」

「そういう問題じゃないですよ」

「そういう問題よ。大体ケガ一つないじゃない。良いから黙りなさい」

「うつつ」

「それにしても、彼がマスターであることに気づかないで助けた私の“うっかり”も酷いけど 恩人の私たちを轢くなんていい度胸してるじゃないアイツ」

「もしかしてアレですか、お姉さん？」

「殴っ血KILL」

第3話 この真名にかけて（後書き）

2号の力はそのうち

第4話 ここは一献如何かな？

膝枕をされている士郎はまだ目を覚まさない。多少力を込め過ぎたせいかもしれないが、きつと疲れているのだろうと思うことにする。橋の下だから少し風が強い。冬の風に当てられて体を壊さぬよう、士郎に魔術の加護を与えて休ませ続けた。

もう20分ほど立つ。士郎が眠っている間に数少ない情報から現状についての考察を巡らせる。セイバーの方は決着がついたはずだ。ランサーは足も速く、疲弊気味な様子だった。おそらくランサーの撤退か敗北。あとはどのタイミングで帰宅するべきか。他のサーヴァントが魔力に惹かれて集まってくる可能性があるため、今はまだ戻るべきではない。

それにしても既に士郎の傍にセイバーがいて、しかも彼女が第4次聖杯戦争の生き残りだというのは嬉しい誤算だった。なぜ黒化していないのかという問題を差し置いておくならば泥に吞まれて受肉したか、あるいは願いによって受肉したかという経緯が予測できる。

そして士郎とセイバーの言動からして2人は親しい仲。士郎やロード・エルメロイ？世から伝え聞いた話を総合しその経緯がこの世界でも変わっていないのなら、セイバーのマスターは衛宮切嗣

士郎の養父だ。彼が現時点で存命なのかは不明なもの、士郎の敵に回することはあまり考えられない。

彼女がどこまで聖杯の真実について知っているか、聖杯を求めているのかという疑問はある。しかし他のマスターと同盟を結ぶことなく、セイバーには士郎を護るという点において共闘できる関係にあるのは素直に嬉しいことだ。何しろ今の自分は

弱い。体

は重く、魔力は不十分。先ほどの魔術師が如何に戦闘慣れした人間だったとしても、こちらの動きが悪すぎた。

呆れのあまり、ため息が自然と零れ落ちる。これではあの慎二に使われていた頃とほぼ変わらない。いや“食事”をしていない分だけ、今の方が悪いかもしれない。

「桜と比べると随分調子が悪いですね。しかもきちんとしたパスも通っていない
流石というかやはりというか、士郎は士郎と
いうことですか」

そう、士郎からはきちんとしたパスが繋がっておらず。自身の魔力だけで活動している状態なのだ。だから新たに宝具になった「自転車2号」には随分と助けられた。何せ必要な消費魔力はペダルを漕ぐ分の魔力だけ。それでいて何倍もの加速力に変換するという、反則級に魔力変換効率のよい宝具だった。ペガサスより速度も威力も落ちる上、秘められた神秘は限りなく低く、ランクも最低のE。しかし未来のエコカーよりも遥かに低燃費なこの乗り物は戦闘だけでなく、今夜のような撤退にも申し分ないほどの活躍をしてくれるだろう。

そして“ライダー”として召喚された今、過去の聖杯戦争では持ち得なかったもう1つの力を手に入れている。これで有する宝具は5つ。アドバンテージは大きいはずだった
魔力供給の問題
さえなければ。

士郎なら他者を襲うことを絶対に良しとはしないだろう。となれば取れる手段は残り2つ。他者を巻き込むのを良しとしないならば、安らかに眠っている士郎を襲うしかない。桜のことを考えれば更に1つまで選択肢は絞られる。

「優しくしてあげますからね。士郎」

そつと呟いて、膝の上の彼に顔を近づけようとする
それは背後からの声に遮られた。
が、

「
今宵の月はまた格別だと、そう思わぬか？」

声の主はサーヴァント、見覚えのあるこの姿は間違いようもない。
士郎を庇う位置に立ち、逃走の体制をとる。

「アサシン！？ 何故貴方がここにいる！！？」

着物姿に無造作にまとめた長髪、長物を備えた侍の風貌と時代が
かった口調。彼は柳洞寺の門を護っていたあのサーヴァント、佐々
木小次郎だった。しかし相手は何を疑問に思ったのか眉をひそめな
がら応えた。

「何か思い違いをしておるようだが、私はセイバーのサーヴァント、
佐々木小次郎。生憎と暗殺の類は不得手でな」

「セイバー？ 彼女が残ったことでまだ枠が空いていましたか」

「彼女とやらのことは存ぜぬが……私には剣以外の才能は持たぬ。

して、そなたは？」

「私はライダーのサーヴァント。名乗りを上げた貴方には申し訳ありませんが、語れるのはクラス名までです。私の真名は明かせません」

「何、気にするな。私が名乗りたいから名乗ったまでのこと。それにしてもだ。そなたのような可憐な華が騎兵とは、こたびの戦それだけでも喚び出された甲斐があつたものよ」

「私のような物を可憐など褒めすぎです。褒めても何も出ませんよ」

この男はスラスラと恥ずかしいことを言う。前はほとんど話すことはなかったが、これがこの男の素なのだろう。そして彼は最初の問いを再び投げかけた。

「ライダーよ。今宵は良い月だ。そう思わぬか？」

「ええ。良い月ですね」

「いや、冗談半分で尋ねてみたのだが。そなた、斯様な目隠しで見えておるのか？」

社交辞令として返答したつもりだったが、そう言われて気付く。彼ほどではないものの、今の私の姿はあまりにも浮いている。魔力でタートルネックのセーターとジーンズを編み、「自己封印」の代わりに魔眼殺しの眼鏡を掛けた。

「現代風の装いもできるのか。それでどうだライダー。今宵の月は綺麗だと思わぬか？」

「確かにここは二つの月が美しい場所ですね。セイバー」

セイバーと彼を呼ぶのに若干戸惑いながらも、今度は社交辞令でない返答を返す。夜を優しく照らす青白い光が水面に反射して淡く光る。そして水面の光が風に揺られる様は、彼の言うとおり確かに

美しかった。

「ふむ、二つの月か。サーヴァントの中にもそなたのように風流を解する者がいたのは僥倖。そなたとはじっくり雅について語り合いたいものよ」

「残念ながらセイバー、今は聖杯戦争中です。状況がそれを許さないでしょう」

「私は戦いを好む性だが、生憎と今そなたと一戦交える気はない。そこに伏せておるそなたの主を見るに、本気を出せぬのであろう。この現世に喚び出され、過去に名を馳せた英雄たちと剣を交えることができると言うなら、お互い最善のときに仕切り直したが良いというもの」

「そうですか。その方が私も助かります。いつ他のマスターに襲われるかわからないと、彼を気にしながらでは私も本気を出せませんから」

「では剣を交えるのは次の機会にしよう。しかし、このような月夜に雅を語らえる女と会えたのだ。丁度私の手元に良い酒もある。ライダー、ここは一献如何かな？」

「酒ですか？」

「気の合った住職殿から少々頂いてな。この世のものとは思えぬ極上の品よ。月を肴に語らおうではないか」

良くセイバーの格好を見てみれば、つまみが入っているであろうが入っていると見えるコンビ二袋と、一升瓶の頭が覗いているスーパールの袋を手に提げている。はじめからこの男は戦うつもりは毛頭なく、酒を飲むに相応しい場を探して歩いていた、ということなのだろうか。

「戦う理由もありませんし、せつかくの誘いです。これで士郎の安全と得るものがあるのなら、私に断る理由はありませんね」

「語らいを邪魔する無粋な輩は私が追い払おう。気にせずこの至高の酒を飲むがいい、ライダー」

「そのような心配は無用です。どうせなら飲み比べでもしますか？」
「その自信、そなたは“うわばみ”の類であつたか。飲み比べも良いが、生憎この酒は味わわずに飲むのはあまりにも勿体ない品。時間もあることだ。じっくり語らおう」

実は正体を言い当てているセイバーに内心動揺する。差し出された袋からお猪口と一升瓶を取り出す。

「そうですか、ぜひ期待したいものです。まずは私が酌をしましうセイバー」

それから15分ほどセイバーから渡された酒を味わった。確かにこれは今まで飲んだ酒とは比べ物にならないほどに絶品で、勿体ないと言ったセイバーの意味がわかった。

聖杯戦争とは全く持つて関係のない話、自動車やテレビ、そびえ立つビルや先ほど寄ったコンビニなど、主に現世の生活について語り合った。彼にとって未来のこの地には珍しいものが多いらしく、彼は現世を謳歌しているらしい。現世については誰よりも知っている私は彼の疑問に答えたり、自分なりの見解を述べる。目の前の大橋の造型と、下の公園のデザインについてセイバーが語っていたところで、思わぬ人物が現れた。

「くそつ、こんなところに居たのかセイバー。今夜こそ敵を探しに行くと言ったのにほつつき歩きやがって」

「慎二、そなたも来たのか」

間桐慎二、かつての私の代理マスターであり、桜を苦しめていた人間の内の1人。現在の方針こそ固まっていけないものの、これからの聖杯戦争でどうしても関わる必要があった人物だ。彼を見て本当に安堵する。桜に召喚されなかったのは誤算であり、少し悲しくもあった。しかし彼に便利な道具として扱われるぐらいなら、例え未熟な魔術師であつても士郎で良かったと心から思った。

「貴方がセイバーのマスターでしたか」

「なっ、お前はサーヴァント……って何やってんだよお前ら!!」

「見ての通り月を肴に飲んでおる。最高の酒と月、そして美女だ。

これは飲まずに居る方が無理というもの」

「……お前目の前に敵がいるのに戦う気ゼロだろ」

言動から察するに常にセイバーに振りまわされているのだろうか。イニシアティブをとれず四苦八苦している様を見て、何だか嬉しくなってしまう歪な感情に気づく。思わず口角も吊り上がってしまった。どうやら今までの自覚以上に彼の事を嫌っていたらしい。しかし、どこか自分の知っている慎二とは違う気がしながらも、やはり同じだと思ってしまう既視感があった。饒舌だったセイバーとの対談とは打って変わり、努めて冷酷な口調で彼に対して言葉を発した。

「おそろくないでしょうね、セイバーのマスター」

「お前、何のサーヴァントだ……って隣にいるのは衛宮じゃないか。もしかしてお前!!」

「ええ。私は彼のサーヴァント。私にも交戦の意志はありませんが彼を襲うなら話は別です。しかし、今の様子だと貴方は私のマスタ

「と知り合いのようですが」

「ああ、よく知ってるさ。まさか衛宮のやつが魔術師だったなんて」

横たわっている士郎を見るその眼は、劣等感に塗れた見慣れた鋭い眼つきだったが、何を思ったのか優越感に浸ったときによく浮かべるだらしのない目つきに変わった。どうせ碌なことは考えていない。

「それで貴方には交戦の意志はあるのですか？」

「慎二よ。先に釘を刺しておくが令呪を使わん限り、私には戦う気はない」

「ああ、もういいセイバー。とづくに僕は諦めてるよ……お前がそういう奴だって。それにそのサーヴァント、って何だか言いにくいな。お前何のサーヴァントだ？」

「貴方にそれを明かす必要がありますか？」

相変わらず他人を刺激する物言いに、感じるどころがあり、つい冷酷な声で返してしまう。

「おいおい、そう殺気立つなよ。セイバーは戦う気がないって言うてんだ。令呪を使ってまで無駄な戦いをするほど僕は馬鹿じゃない」

慎二は左手で髪を掻き上げるようにしながら尊大な口ぶりで話す。その動作一つ一つが癢に障るのは本能的な部分であり、どうしようもない感情であった。

また始まりましたか。一体どこからそんな自信が湧いてくるのでしょうかね。

「なあ、そこで寝てる衛宮の奴、召喚したけどどうせ半人前のモグ

りだから倒れているとか、そんなとこじゃないのか？」

慎二のくせに、完璧ではないが意外と良い線突いてくる。慎二のくせに。大事なことなので心の中で更にもう一度繰り返す

慎二のくせに。

「セイバーのマスター。仮に貴方の憶測が合っていたとしても、私には貴方に対し素直に応えるメリットがありません」

「あるさ」

「何ですって？」

「最優のセイバーを引き当てたこの僕が、そこでくたばってるへっぽこ衛宮と同盟を結んでやってもいい。そう言ってるんだ」

やけに得意げなニヤケた笑みに不快感を覚える。気持ち悪い。おそらく桜が召喚したセイバーを偽臣の書で従えて舞い上がっている道化ぶりが、慎二の存在そのものが生理的に受け付けられない。

しかし、慎二の提案は私一人の感情論で簡単に跳ね付けられるものではない。

士郎はまだ目を覚まさない。

協力体制をとれるであろう凜やアーチャ　ともまだ会っていない。

前回の聖杯戦争を生き残ったセイバーの事情や現在の聖杯の状況もわからない。

慎二のサーヴァントということは即ち桜のサーヴァントでもあるということ。

か。桜？

私はどうするべきです

おまけ

「にしても、慎二よ。その話はライダーのマスターが目覚まさねば無意味では？」

「多分、もうすぐ目が覚めるとは思っているのですが」

「そうだな　　ってセイバー！　お前こいつがライダーって知ってたのかよ、言えよー！！」

「慎二、駆け付け一杯だ。これは格別に旨いぞ」

「僕のサーヴァントのくせに無視すんな！」

「ちなみに“ちーかま”、“さらみ”、“茎わかめ”も買っておいた」

「……もついい。この馬鹿が起きるまで今夜は飲んでやる。そのの茎わかめも一緒にほら寄せセイバー」

「ほれ」

「あつ旨いなこれ」

「であろう？」

「もう一杯注いでくれライダー」

「……何で私が慎二なんかに」

「な、なんだよ。これは元はと言えば僕の手で買ったんだぞ。ただ酒飲ませてんだ当然だろ？」

「うっ、慎二が正論を言うなんて。確かに立場を考えれば……いや、しかし、私のプライドが」

「ライダー、私にももう一献」

「ええ、どうぞセイバー」

「何なんだよその露骨な差別は！ 衛宮のへっぽこサーヴァントのくせにい……」

「何か言いましたか慎二？」

「そして、いつの間にか呼び捨て。さっさと起きろ、何とかしろよ衛宮！ お前正義の味方なんだろ！？ この性悪女をどうにかしてくれ！」

第4話 ここは一献如何かな？（後書き）

あとがき

つてことで今回はまさかのワカメ回でした。色々サーヴァントを予想されてくれている方も多いみたいでしたがいかがでしたでしょうか？ 日本の英雄、しかも架空の存在ですが、原作でも出てきたし、小次郎セイバーでも誤差範囲内ですよな？

ワカメがセイバー（小次郎）に振り回されてZEROというウェイバーっぽいポジション。根は慎二のままですし、魔改造まではしません、ちよっと一味違うワカメです。どちらかというとホロウ準拠。

そして目覚めぬ士郎。空気です。

第5話 川のつづらな腫を見て下さい (前書き)

あけましておめでとういねー！

第5話 このつぶらな瞳を見て下さい

セイバーの持ってきた酒は今まで味わったことのないほどの美酒だった。一升瓶丸々あった量がいつの間にか3分の2ほど。聖杯戦争中だというのにこのような展開になるとは全く予想外だったが、この世界ではセイバーとなった佐々木小次郎と親交を深めておくのは悪い話ではない。今の彼は私の知っていたアサシンよりもおそろしく強い。例えばあの慎二がマスターであつてもだ。

それに対して今の自分はマスターからの魔力供給は全くなく、ステータスもかなり低下している。ほとんど魔力を用いない『自転車2号』はともかく、『キュベレイ』や『騎英の手綱』^{ベルレフォン}を用いるのはかなり厳しい。そのような状況であるために手を結べるサーヴァントは多い方がいい。2人のセイバーがこのまま味方になるのなら、他の陣営にそう遅れを取ることはない。それで必要な時間を稼げる。桜を救うための準備期間が。

淡く輝く二つの月と肌を突き刺す夜風を肴に、並々と注がれたお猪口を啜る。横目で見ると慎二の顔は紅潮し、すっかり出来上がった。彼も酒の味に満足らしく、酒を調達してきたセイバーのことを褒めていた。屈託したナルシストである慎二の他人を褒めるという行為は前の世界を知る私にとっては信じられない光景。この慎二は少しだけマシな人間なのかもしれないという微かな希望を抱く。

しかしそれは一瞬の気の迷い。一口に手元の酒を飲み乾して、自らの首を横に振る。あの男の上機嫌な顔を見るほどに胸の奥底に眠る復讐心が蘇るのを感じてしまった。この男の笑顔の裏できつと桜は泣いているのだ。やはりこの男は利用するだけ利用して殺す。それは“私だけ”の願望。愚かな願い。でもきつとそれは容易には成

しえないだろう。

前の世界で、いやおそらくこの世界でも桜に暴行を加え続けているこの男には最大級の恐怖と絶望を与えた上で、肉片の1つすら残さず消し去りたいとさえ思っている。しかし、桜を救出する上で間桐の屋敷に侵入する糸口や、蟲を消し去るための選択肢が増えるかもしれないと思うとこの男を今直ぐに殺すのは惜しい。それに私がこの男を殺すことで桜の負の感情に歯止めが掛からなくなってしまえば本末転倒だ。

私の最優先事項は桜を救うこと。そしてその上で士郎を死なせないこと。復讐はその次だ。怨みを忘れずに牙を研ぎ続けるだけで良い。勘違いの上に成り立った優越感に浸っているこの男は、前の世界と同じように士郎を仲間に取り入れようとしている。ならば今は状況に甘んじよう

今は。

「なあライダー1つ聞いてもいいか？」

「質問によります」

酒の味に満足そうな顔を浮かべながら気軽に声を掛けてくる慎二に対し、努めて冷淡な声で返す。彼も私のその感情に既に気づいているはずだが、取るに足らないこととばかりな態度で端的に言葉を続けた。

「衛宮にケガを負わせた敵はどういう奴だった？」

「短刀直入ですね。敵の襲撃を受けたマスターを連れて戦線から離脱したことは認めましょう。ですが、慎二。まだ貴方は私のマスターと同盟を結んだわけではありません」

「とのことだ。残念だったな慎二よ」

空になった私のお猪口に酒を注ぎながらセイバーは笑う。

「もういい、お前とは交渉にすらならないな。まずは衛宮に話をしろってことか。だけでもう1つだけ聞かせるライダー。お前こんな所で飲んでる場合なのかよ？ 追手がかかって来るとは思わないのか？」

ため息交じりに慎二がしつこく聞いてくる。顔には出さないように心掛けるが、自分の中の苛立ちと生理的嫌悪感が更に増すのを感じた。どうにも私1人でこの男との会話を続けるのはつらい。仕方ないので最低限の情報だけ渡すことにした。

「襲撃者は他のサーヴァントと交戦中です。それなりに消耗が見られましたから、彼らも万全の状態のサーヴァント相手には撤退したと推測できます」

「襲撃場所は？」

「マスターの自宅です」

「衛宮の家か。ならこいつを連れて今から戻るぞセイバー、ライダー」

「何を考えているのですか慎二？」

「何って、敵は多分撤退して戻っても大丈夫なんだろう？ 衛宮をここに寝かせておくのも具合悪いし、家に返すのが一番だろ。こいつが起きなきゃ話が先に進まないしな」

「ですが、もしかしたらまだサーヴァントが」

「僕には最優のセイバーがいるんだ。仮に2騎のサーヴァントが残っていても消耗した奴等なんかに負けるわけがないさ」

自信満々で答える慎二だが、その自信は私の時とは違い確かな根拠があるものだろう。少なくともセイバーの“最優”という肩書きに対しては絶対の信頼があるようだった。そしてその様子にセイバ

「も満更でもない様子だった。」

「ようやくこの身に戦いの場を与えてくれるか」

「最初から今日はそのつもりだって言っただじゃないか。それにうまく行けば一気に敵が2組脱落するわけだしな。僕の魔術師としての優秀さをアピールするには最高の舞台じゃないか」

「2対1でもセイバーなら勝てるぞ？」

「2対2じゃないのかよ。ああそうか、わかっているよライダー。」

「お前はまだ戦力外だからそのヘボマスターを守っていればいいさ」

「慢心している慎二を戒めようとした言葉だったが逆効果だったようだ。彼は腹を抱えて笑いながら答えた。」

「まあだからこそ僕との同盟に引き入れてやるんだけどね。最期まで残ってもセイバーより弱い奴と組んでいれば、僕は確実に勝者になれる。まあお前にとっても悪い話じゃない。万が一にでも最期にセイバーに勝てたら聖杯が手に入るんだからな。でも馬鹿なお人好しの衛宮だ。お願いすれば聖杯の1つ位喜んで譲ってくれるさ。ハハハッ」

絶対の自信からか、包み隠さず同盟の目的を彼は晒した。両腕を抱えて笑い続ける彼の様子に眉間に皺を寄せてしまいが何も言い返せなかった。

戦略的にも、衛宮士郎という男を理解した上でもこの男の言うことは正しい。聖杯に願うことはわからない。しかし矮小な器の持ち主の事だ。名誉や財宝、あとは魔術回路を得ること位だろう。衛宮士郎もそれを快く思うかどうかは別問題として、他者の命を奪うような願いではない。嗜める程度のことはしても、全面的に反対の立場はとらない確率が高い。願いの種類によれば簡単に聖杯を渡すだ

ろっ。

前の世界の経験からか彼のことを甘く見過ぎていた。慎二は確かにこの世界でも慎二だ。根本的な性格や思考回路は変わっていない。しかしセイバーを引き当てたことが、凜と手を結ぶ前の士郎と出会ったことが、今まで見せなかった彼の新たな一面を引き出した。

悔しいが認めよう。この彼は少しだけ以前の彼よりも手強い。慢心はあれど只の馬鹿ではない。この男との関係がこれからの聖杯戦争を大きく左右するのかもしれない。

「どうだライダー。もう終わってそうか？」

「魔力の残滓は感じられますが、もう敵はいないでしょう」
「そのようだな」

衛宮邸の門のところまで来て内部の安全確認をする。セイバーの見解も同じく、待ち伏せなどの危険性は少ないようだ。残っているとすれば彼女だけだろう。セイバーに門の扉を開けてもらって、片手に士郎、もう片方で自転車を押しながら門をくぐる。

結界そのものは効力が生きていたようで、私たちが侵入したことで警告音が鳴った。歩みを止め、腰元の刀に手を添えて警戒するセ

イバー。

「む、この音は」

「心配ありませんセイバー。ただの警告音です」

「音だけってそんなシヨボイ結界も一応張ってたんだな。モグリでも魔術師か。衛宮、勝手に入るぞ」

「失礼する」

「おじゃまします」

玄関のカギはかかっておらず、扉を開けてそのまま中に入る。すると予想通りの人物の声が奥から聞こえてきた。

「遅いですよ。ようやく戻ってきましたか。おかえりなさいシロウ、それにライダー」

普段着であろう白のシャツと青のロングスカート姿で、もう一人のセイバーが出てきた。彼女の体から魔力の流れはほとんど感じ取れず、ほぼ一般人と変わらない。おそらくあのリボンで再び魔力を抑制しているのだろうと察する。

「どうもアルトリアさん」

「シンジ、貴方がどうしてここに？」

慎二が彼女に向かって挨拶をする。尊大な態度はなく、僅かばかりの親しみと敬意が籠った声色だった。彼女の方も慎二の来訪は予想していたなかったらしく、戸惑いを隠せない。そして視線は彼の隣の侍の方に流れた。

「セイバー。彼のことやマスターのことを含め、色々と今後の相談があります。奥で話をさせてもらえないでしょうか」

「セイバーって、アルトリアさんに何言ってるんだ」

「いいえ彼女は間違ってます。シンジ、シロウが目覚めたら貴方にも少しだけ教えましょう」

「それは一体どういう」

慎二は彼女と面識はあるものの、聖杯戦争とはまったくの無関係の人間と思っているようだった。私に対して怪訝そうな顔を浮かべたままだ。

「貴方がシロウの友であってくれて心強い。隣の武人も名のある英霊と見受けしました」

「魔力こそ感じられぬがその凜とした佇まい、そなたも名のある武人と見受けた。私はセイバーのサーヴァント、佐々木小次郎。セイバーと申したか、そなたのことを私は知りたい」

「佐々木小次郎、貴方ほど高名な剣士がセイバーですか。私も少し興味が湧きました。ここは寒い。少々荒れていますが奥に上がって下さい。温かいお茶でも用意しましょう」

彼女は笑みを向けて客人を中へ通す。これは少々込み入った話になりそうだった。

「ありがとうございます。ライダー」

「マスターの家ですから。サーヴァントとして当然のことです」

ランサーとの戦闘によって壊れた床や窓ガラスなどを修繕しただけだが、誠意の籠った礼で感謝された。彼女に入れてもらっ煎茶が酒で火照った体に染み渡る。一息ついて部屋を見渡してみる。何十年と過ごした見覚えのある部屋のはずだったが、随分と様子が違っていた。何と表現すれば良いのか、端的に言い表すならば“可愛らしい”のだ。

「あの、セイバー。別にどうでも良いことかもしれませんが、この可愛らしい部屋は貴女の趣味ですか？」

テレビや棚の上に飾られているライオンや猫、アザラシなど無数のぬいぐるみが大事に飾られていた。どう考えてみても土郎の趣味とは考えられず、大河や凜、桜の趣味とも異なる。他の人間がこの屋敷に出入りしているのなら早めに把握せねばならない。それ位の軽い気持ちで尋ねてみた。

「ライダー。誤解のないようにあらかじめ言っておきますが、これは決して私の趣味ではありません」

「では、マスターはこんな趣味の持ち主だったと」

「違います！ 確かにジェニファーマもスティングモリリーもみんな私のものです。ですが、これは決して私の趣味ではありません！ 断じて違います！！」

手を広げながら必死に弁明するが、どうも名前までぬいぐるみ一つ一つに付いているらしい。予想通りだったが予想以上とも言える現実に若干引いてしまう。強い語気で焦る様と真剣なその瞳はどこか虐めたくなるオーラを放っていた。

「これは私の仕事道具。そう、仕事に必要な道具なのです。他意は

「ありません」

「ふむ、仕事とな」

彼女曰く、あくまでも仕事道具らしい。一体どういった仕事なのか気になったが私より先に訊かれてしまった。

「アルトリアさんは新都のファンシーショップに勤めているからね」「ファンシーショップとはどのような所なのだ？」

「人形やぬいぐるみなんかの可愛い飾り物なんかを専門で売っている店だ」

「ほう、なるほどな。堂々とした振る舞い精悍な騎士と見うけていたがその実、心の中は純真な乙女であつたか。いやはや」

軽く笑い出す彼に釣られて私もつい笑ってしまう。あの慎二さえも笑う。その様子に耐えきれず、赤らめた頬を膨らませた彼女が吠えた。

「な、何が可笑しいのですか貴方たちは！」

「いえ、何も可笑しくありませんよ。ただ貴女が可愛いと思っただけです」

「ライダー、貴女の認識は間違っています。私は可愛くありません。可愛いのはこの子たちの方です。このつぶらな瞳を見て下さい！この覗き込んでくるような感じが何とも愛しいと思いませんか！？」

確かステイングと呼ばれたライオンのぬいぐるみを抱きあげて、私の前に付きつけ必死に訴える。元々彼女がこういう趣味だったのか、この10年の影響なのかは分からないが、私の知っていた騎士としてのセイバーよりも人間らしさが前面に出ていると感じた。しかも店員として働いていることから彼女はこの地にしっかりと根付いているはず。きっと彼女なら冬木を守るという名目で良い協力者

になれるだろう。

「うつつ、何か煩いな」

そんなことを考えていると彼女の右隣で横になつていた彼がふいに言葉を発した。気の抜けた声で間延びしながら上半身を起こす。ようやく目覚めたらしい。

「アルねえ。って慎二、何でお前がここに居るんだ？ それにえつと確か」

「ライダーです。マスター」

思考を整理しているであろう彼は面々を指差しながら呟いた。事件の当事者ながらもしばらく眠っている間に事態が進行してしまっているため全く状況を理解できないのも当然だろう。

「やっと起きたのかよ衛宮、ようやく話を進められる」

やれやれと呆れた様子の慎二。彼にまで馬鹿にされる自身のマスターのことが少し恥ずかしい。士郎だから仕方ないと言えばその一言で片付くが。その仕方ないマスターのために私は事実を伝える。

「慎二、その前にマスターに聖杯戦争のシステムについて話さなければなりません」

「は？ 何で今さら」

「聖杯戦争ってなんだよそれ。さっき襲われたことと関係しているのか？」

私の言った意味がわからないといった表情を浮かべた慎二も、士郎の呆けた顔を見て事情を理解し目を伏せた。

「慎二、この通りです。全く私のマスターは聖杯戦争について知りません」

「シロウは先ほどライダーを召喚したばかりですから。シンジ、貴方が魔術師だとは知りませんでした。貴方からシロウに聖杯戦争について教えてくれませんか？」

前の戦争の勝者だという彼女や私の口からでなく、慎二からというのが若干気にかかる。しかし彼女がどこまで知っているのかはまだ掴めていないが、聖杯戦争の本当の意味と聖杯の真実について語るには時期尚早だろう。だからあえて横から口を出さずにいることにした。

「アルトリアさんに頼まれたなら仕方ないな。衛宮、半端な魔術師のお前に教えてやるよ。この冬木市で行われている大儀式、聖杯戦争について」

第6話 飛ばし過ぎだぁバカヤロおおお!!!

「どうだわかったか衛宮？」

「ああ。大体の事情はわかった。碌でもないことに聖杯を使わる前に俺たちのどちらかが聖杯を手に入ればいいんだな」

士郎がやる気になったのは喜ぶべきなのでしょう。

慎二による基礎的な説明を士郎は一応理解したように頷く。てっきり士郎はマスターとしての権利を放棄するとも言い出すかと思っていたが、腐っても慎二は彼の親友だ。一般人を巻き込むかもしれないという点を強調した彼によって、正義の味方の決意は固まったようだった。

「そうだ。僕が望むのは実力に見合った名誉だけだ。お前が望むのはせいぜい守れる力ぐらいか。それなら僕たちが他のサーヴァントを全部倒して、最期にどっちか勝った方が使えばいい。これが一番冬木市にとって平和だ。単純な話だろ？」

「すごいな慎二」

「ほう。慎二がそこまで考えていたとは私も感心したぞ」

堂々と意見を提示する慎二に士郎とセイバーは完全に吞まれている。その様子を見て自然と腕を組み直してしまったのは、自分だけがその事実を受け入れたくない気持ちの表れなのだろう。

この一連の会話でも世界間の状況の乖離を痛感してしまう。今はアルトリアと名乗っている元セイバーがいることからして、10年前の前提すら異なっている。桜を取り巻く状況がより過酷になっているのか、いくらか緩和されているのか、それとも養子に出されて

いるのかすら今の自分にはわからない。そんな気持ちは誰かが察することができるわけもなく、マスター同士の会話は続く。

「俺にはまだ望みはないってのが正しいけれど、それで無用な戦いに巻き込まれることがなくなるなら俺は全力を尽くす」

どうやら同盟は決定らしい。2人は堅く握手をする。2人のセイバーもその光景に頬笑みを向ける。不満げな顔をしているのは自分だけだ。

「それでこれからの方針はどうするのだ慎二、そして士郎よ」

「まずは俺たちの戦力と現状を把握して起きたい。あつ、おかわり注ぐぞ慎二、セイバー」

「サンキュ」

「かたじけない」

「じゃあまずは僕のセイバーだ」

白地に黒の七宝が描かれた湯呑みを渡す慎二。士郎のまともな返答に対して満足そうに頷いて語り始める。

「セイバーは7騎のサーヴァントの中で最優と謳われているんだ。ステータスも高いしスキルも優秀だ。まず1対1なら負けない。そうだろ？」

「セイバーのサーヴァント、佐々木小次郎の名にかけて勝利を捧げようではないか」

「おい！ 今さらりと真名を」

セイバーの発言に彼の顔は青ざめた。士郎の手元に湯呑みが行っていないかったら、きっと悲惨なことになっていただろう。やっと慎二らしい表情が見れたことに安堵した。いつまでも拘り続ける卑屈

さに若干自己嫌悪しながらも、彼に突っ込みをいれる。

「シンジ、玄関先でも伺ったのですが」

「ええ、私も伺いました」

「そうでしたっけ……。あのときは空気に吞まれて」

言葉が弱々しくなる慎二。どうやら彼女にだけは敬語を使っらしいことによりやく気付いた。何か弱みがあるのか、彼女だけ尊敬しているのか。どちらにせよ彼女が慎二に対するカードになりそうだということ念頭に留めておく。

「えええつとだな衛宮。セイバーはこれくらい有名なサーヴァントなんだ。まあ僕がわざわざ文献を漁って触媒まで用意したんだからな」

「へえ」

「どうも佐々木小次郎が冬木に縁があるみたいということが分かってね。柳洞のそこから触媒になる書物を拝借してきたんだよ。知名度補正もあって日本じゃ最強のはずだ」

「ちよつと待って下さい」

「何だよライダー」

手振りを交えながら得意げに語っていたところを遮られたせいか、慎二の語気には苛立ちが混じっていた。

「すみません。シンジ、貴方は色々勘違いしているようです。」

「何がだよ。言ってみなよ」

「まず第一に聖杯戦争において、西洋の英霊以外が呼ばれるなんてことは通常ありえませんか」

「そつなのか慎二？」

「そんなの僕は知らないぞ。それにまずって何だよ。続けるライダー

」

自分の成果を真つ向から否定された彼は眉間に皺をよせ、明らかに不機嫌になっていた。シンジを貶める意図は全くない、と自らに言い聞かせながらも彼の間違いを訂正する。

「そもそも大前提として佐々木小次郎という英霊は存在しません。そうでしょうセイバー？」

「そうだ」

間を開けずに続いたあつけない返答に、その言葉に場の空気が固まった。マスター2人の口は開いたまま、セイバーでさえ目を見開いて驚きを隠せない様子だった。

「佐々木小次郎という剣士は実際には存在せんよ。私は人々が思い描く『佐々木小次郎』という幻想の枠に選ばれただけの1人の剣士だ」

「そうなのかセイバー。僕はお前を最強だと信じて」

信じて来たもの、最優のセイバーを呼んだという自信が崩れ去り、気落ちする慎二。セイバーは士郎から渡された素焼きの湯呑みを一口飲んだ後、セイバーとしての言葉を発する。

「慎二、例えこの名が借り物だとしても剣技だけは本物だ。佐々木小次郎の名を、人々の想いを今の私は背負っているのだ。人々の期待は裏切らんよ」

揺るぎない自信、それ以外は不要だった。その言葉から伝わる想いは場にいる全員が感じ取れただろう。アルトリアは無言で頷いて青磁の湯呑みを口に付け、士郎はTVに魅入った子供のように眼を

輝かせている。

「絶対勝てよ。僕はお前を信じて喚んだんだからな」

「その期待、必ず応えようマスター」

慎二の間違いを指摘しただけだったが、結果的には何故か新たに主従の絆を深めることになってしまったようだ。味方としてはもちろん喜ばしいが、自分の知らない慎二を作り上げるのに自らが関わってしまったという事実が気がつく。こうやって世界同士は離れていくのだと身を持って実感した。

「それよりライダーだ。お前実際強いのか？」

気を取り直した慎二が短刀直入に聞いてきた。

「今は士郎とのパスが繋がっていませんから、充分に戦える状況とは言えません」

「パス？」

「士郎から本来送られてくるべきはずの魔力が流れて来ないということですよ」

「それはヤバいのか？」

全く何も知らない士郎は気まずそうな顔をしながら尋ねる。

「勿論です。元々霊体なのでですから実体化するだけで魔力を消費します。幸い私の単独行動スキルで消費は抑えられていますよ」

「要するに半人前のお前のせいで満足に戦えないってことだ衛宮。それでライダー魔力供給はどうするんだ。何も喰わずにってのは無理だろう。でもお前のマスターは衛宮だしなあ」

おそらく慎二は魂喰いのことを言及したいのだろう。しかし彼も士郎と先に組んでいる状況では言い出しにくいようだった。

「そうですね。慎二の言うとおりです。しかし私には独自の魔力を回復させる手段を持っていますから」

本来なら士郎の血を吸うことで魔力を補充しようと考えていたのだが、それよりも遥かに美味であろう存在に先ほど気づいてしまった。

「アルトリアに一肌脱いでもらえば解決します」

「私にできることがあれば何でも協力しましょう。貴女がシロウのサーヴァントなのですから」

「ふふっ、言質は取りましたよ？」

確かに言質は取った。やる気に満ち溢れている彼女には申し訳ないが色々と味わわせてもらうことにする。もしかしたら魔力に満ち溢れている彼女は綾子より美味しいかもしれない。

「それでライダー。魔力をどうにか出来たとしたら、お前はどれくらい戦えるんだよ？」

「そうですね。宝具の数ならかなり多いと自負しています。詳しくは言えませんがランクA+の対軍宝具もありますから。セイバーが1対1の戦いに優れているというなら、私がまとめて敵を薙ぎ払うといった戦略をとることもできるでしょう。それから宝具に匹敵する固有スキルも有しています。こちらら魔力さえ充分に運用できるならいくつかのサーヴァントには対してはかなり有効でしょう」

「ランクA+の対軍宝具！！？ 正直見くびってたけど大当たりじゃないか衛宮。益々お前の未熟さが呪わしくなるよ」

「良く分かんが、俺がダメだってことは良く分かった。ごめんなライダー」

慎二は驚いてくれたらしい。が、頭を書きながら士郎のことを嘆く。士郎も申し訳なさそうに頭を垂れていた。ため息をひとつついた士郎は隣のアルトリア方を向く。

「あとそれから、アルねえか」

「気になって仕方ないってところですか。シロウ、シンジ。簡潔に述べましょう。貴方達が察しているように私もサーヴァントの身です。シロウ、ずっとキリツグの使い魔だと偽って申し訳ありませんでした」

「やつぱり。ってことはアルねえは爺さんの」

「はい。１０年前セイバーのサーヴァントとしてキリツグに召喚されました。そして私たちは第４次聖杯戦争を共に闘い、最期まで勝ち抜いた上でこうして私は新たな肉体を得ました」

「まさか。アルトリアさんが、しかも前回の勝者だなんて。ライダーの言っていた襲撃者を追いついたのはアルトリアさんだったということか。納得しました」

「ランサーたちは疲労気味でしたから敵マスターの指示で直ぐ撤退してくれましたよ。それから私が勝者であるという事実を知っている人間はごく僅か。ほぼ皆無でしょう。魔力を抑えながらこの１０年の間生活していましたしね」

「セイバー、いえアルトリア。貴女の願いはそれで叶ったのですか」

おそらくこの場の誰もが聞きたかったことをあえて口にしてみた。注目が彼女に集まる。

「結論から言うと叶いませんでした。代わりに二度目の生を得れたのは幸運であり、愚かな望みを持った罰なのかもしれません」

少し俯き憂いを滲ませた表情の彼女は自らを戒めるような意味の言葉を語った。そして凜とした表情に戻ると、しっかりとした口調で続けた。

「前回の勝者として1つ忠告しましょう。聖杯に幻想を抱かない方がいい。断言はできませんが、おそらく貴方たちが思い描いているものと異なる可能性がある。聖杯戦争が始まってしまった以上、私たちは戦わなければならないでしょう。しかしその願いのために自分を見失わないようにと、一言釘を刺しておきます。特にシンジ、ライダー。もしかしたら私の杞憂かもしれませんが、決してこのことは忘れないでいて下さい」

半分睨んでいるかのような眼差し。やはり彼女は真実に近い所に居るのかもしれない。

「忠告ありがとうございます。前回のセイバー。その前回の聖杯戦争について 詳しく聞くことはできないですね」

「はい。今はまだこれ以上語ることはできません。必要があると感じれば、その時全てを話しましょう」

彼女の真剣さ故か空気が重くなった。士郎はさっきから黙ったまま、改めて全員の湯呑みに茶を注ぐ。

「それから安心して下さい。今の私には望みがありますがそれは聖杯に望む類のものではありません。シロウとシンジには見返りなしで協力しましょう」

「いいのかアルねえ？」

「キリツグに任せましたから当然です。そうですね。これからの夕食に小鉢を1つ追加してくれたら言うことはありません」

「アルねえはやっぱりアルねえだ。良かった。そんなことで良かった」

たら俺頑張るからさ」

「なら僕はタイヤキの差し入れでも」

「本当ですかシンジ。それでしたら焼きたての小倉あんを所望します！」

アルトリアの食いつきっぷりに皆が笑う。先程までの深刻な雰囲気は消え去った。この笑顔がずっと続けば、桜がこんな風に過ごせるならと、未だ会えていない嘗ての主のことを連想した。

「とりあえず教会に行こう。衛宮」

「教会？」

「ああ。まずは衛宮をマスターとして登録に行くのさ」

教会という言葉聞いてこの戦争の監督役を思い出す。言峰綺礼

桜を救うための最重要人物と考えている1人だ。心臓に巣食っていた蟲の本体は取り除けなかったものの、その他の蟲を摘出したのは彼だ。さらに士郎の腕を繋げ、2人目のアサシンの足止めまでこなしてくれた。感謝してもきれない程に世話になっている。この世界の桜を救うには彼の協力なしにはあり得ない。

「教会ってどこなんだ？」

「隣町だから今から行けば朝には帰れるだろう」

「わかった。行こう慎二。あとライダーとセイバーも行くんだよね？」

「うむ。傾く月夜の下を散歩と洒落込むとしようか」

「サーヴァントとして当然です」

「そういえばアルトリアさんはどうするんですか？」

「私も一緒に付いて行きましょう。それからシンジ、セイバーの騎乗スキルはどのくらいでしょうか？」

「確かBはだったと」

「充分です。それでしたら私に妙案があります」

アルトリアはポケットから何かを取り出すと、ぬいぐるみに向けた時と同じくらいの笑顔を振りまいた。

「セイバあああ！ 飛ばし過ぎだあバカヤロおおお！！！」

「これが鉄の馬か。馬なのに隼とは中々粋なものだ」

「更にふかすなコラあああ！」

涙目でみつともなく叫ぶ慎二。現在バイクに跨ったセイバーとその後ろにしがみついている慎二が寝静まっているはずの住宅街を疾走している。アルトリアと士郎、そして自らの3台がそれに並走していた。

侍姿という珍妙な光景だが、セイバーのライディングは様になっている。そしてあの蒼いカラーリングの“スズキ・GSX1300Rハヤブサ”はかなり整備が行き届くようだった。排気量3000cc最高速度300kmを超える有名過ぎるモンスターマシンだ。彼女の給料だけで購入できたのか甚だ疑問だが、その速さだけを追い求めた美しいフォルムを持つ機体がとにかく羨ましい。しみじみ

とセイバーの駆るバイクを見つめて思う。

「アルねえメーターおかしいって！ 道路交通法は！？」

「シロウ、今は緊急事態です。峠と比べたらこの程度の道など、なんてことはありません。安心して捕まって下さい」

「無理無理っ、遠心力がぁぁぁぁぁ！」

そしてアルトリアの駆るバイクもとんでもない逸品だった。“ホンダ・CBR1100Xスーパーブラックバード”。ハヤブサよりも若干最高速度は劣るとはいえ充分に魅力的な単車だ。漆黒の機体に極太2本出しマフラー。その機体と同じ色のライダースーツを纏った彼女。こちらの方が長く乗っているらしい彼女のライディングは、騎乗兵の杵を与えられたこの身からさえ賞賛のため息が出るほどだった。

しかし、納得が行きません。

「何で私だけ自転車なのですか、不公平です！！」

2号が壊れないギリギリの速度でペダルを漕ぎ続ける。セイバー、いやアルトリアが羨ましい。土郎が迷わず彼女との2人乗りを選んだからではなく、

「この子の全力ではないとはいえ、自転車で並走できる貴女の腕は素晴らしい。時代はエコです頑張っして下さい」

「そういう問題ではありません！！」

「前を見るライダー！ 歩行者っ！！」

2人の歩行者の脇を一瞬で3台が抜き去った。白い髪の少女と黒い人影。

あれはまさかイリヤスフィール？

士郎たちが教会で登録を済ませている間、サーヴァントの3人は外で待機していた。セイバー2人はバイクについて何か語っている。残された1人、外壁にもたれかかってこれからの方針を考える。

まず最終目標が桜とアンリマユを切り離すこと。これには嘗て士郎が行ったようにルールブレイカーを用いる手段以外考えつくことができない。となれば行使できるのは3人。担い手のキャスター、投影魔術の使える士郎とその可能性の一端であるアーチャー。

行動指針を逆算するとキャスターかアーチャーを味方につけるのが最速で桜を救う手段だ。しかしこの世界は知っている世界と色々異なる。あのキャスターやアーチャーがいない可能性だって充分にあるのだ。そのときは士郎が投影を使いこなせるようにまで成長させた上で宝具の記憶を与えることになるだろう。先は長いかもしれない。

先に慎二があらかた説明しておいたせいか、5分と掛からずマス

ター2人が外に出て来た。今日は無理せずに回復に努めるべく帰宅することになった。既に拠点がランサーにばれているため襲撃を警戒し、慎二も今晚は衛宮邸に泊まることになった。

「綺礼、見逃して良かったの？」

残り数センチになった蠟燭のように消え入りそうな声で、奥の部屋から出て来た少女が疑問を投げかける。歳は背丈からして10歳前後。彼女の肌は浅黒く中東系を思わせる。闇に溶け込みそうな深い色をした髪は肩まで伸ばし、少し外側に跳ねている。冬にしては薄着な黒のワンピースを羽織った少女の瞳はどこか虚ろさを漂わせていた。

「構わん。私たちの聖杯戦争は既に10年も昔のことだ」
「そう」

諦観を僅かに滲ませる神父と抑揚のない声で返す少女。

「カレン、諜報活動は引き続き続けろ。特にさっきの赤髪の方は“魔術師殺し”の息子だ」

「そう。でもあの人は全然ダメ。もう一人はもつとダメ」

小さな声ながらも断言する。その少女の頭に手を置き、神父は言葉が続けた。

「そうだな。しかしあの男の息子が何を為すのか、私はそれが気になって仕方がないのだ。それに魔術師気取りの彼もな」

「それはどうして？」

「どちらも本物ではないからだ。衛宮切嗣、かつて私が答えを求めたあの男の夢は遂に叶うことはなかった。しかしその借り物の夢を、その馬鹿けているとも言える夢を追いかけている男がいる。そして生まれながらに才能が欠落し、それを認めながらも足掻こうとする男
誰かに似ていると思わんか？」

自虐めいた笑みを浮かべた言峰に対し、カレンと呼ばれた少女は一息の間をおいてから無表情なまま応える。

「うん、似ているね。綺礼の言いたいこと少しだけ分かった」

「偽物同士の組み合わせとは実に皮肉なことだ。弱き彼らが何を成すのか、神に仕えるものとして全てを見届ける責務が私にはある」

「あの子のことはいいの？」

「時臣師の娘だ。凜のことなら心配要るまい。召喚早々神の家に酒を売りつけに来るのだ。我らの神相手ですらこの始末だ。他のマスターが彼女を抑えられると思うか？」

「思わない」

少女は首を横に振りながらも微かに笑みを見せた。

マスター2人が教会に入った頃、雪のような肌と髪を持った少女は足元を凝視しながら1人呟いていた。隣には長身の黒い影。

「ハハハッ。お兄ちゃん、セイバーにべつたりなんだ。そうなんだ。せつかく日本まで来たっていうのに。やっぱりお母様もキリツグもお兄ちゃんもセイバーが全部奪ったんだ」

コートの両袖を力強く握り締め、悲しみを小さな掌に刻み込む。その震えが魔力の乱れとなって周囲の空気を揺るがした。

「セイバーが来てくれればキリツグは死ななかったのに。ちゃんと事情を話してくれたら許してあげようかなって思ったけどもういいや。許せないよね？ セイバーのこと、絶対に許せないよね？」

隣の従者は何も答えない。少女が纏う空気は悲哀から怨嗟の色に移り変わっていった。まるで彼女の瞳の色のように。そして彼女は全てを決意する。

「そうだよ。裏切り者はみんなまとめて殺しちゃえ、バーサーカー

「!!」

「!!!」

狂気
に鳴り響いた。

白き少女の嘆きと黒き戦士の咆哮が冷たい蒼月の下

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4739z/>

王の酒と自転車 2号

2012年1月8日22時50分発行